

紅葉を見て来よう

9./15/2007 ～ 9/19/2007

ひょんなことから、バケーションをとることになり、しかも三日。土・日を含めて五日間の休暇となりました。こんなチャンスに二度とないと、この時期、カナダとの国境は紅葉が見事ということで、時期的にはすこし早すぎたように気もしますが、思い切り、スペリオル湖、ミシガン湖、そして、ヒューロン湖を回ってきました。

秋は、もの思いをするには絶好の時期と、勿論、足の向くまま、気の向くままの一人旅。



- 一日 目は、リンカーンから、大聖堂が見事という、ミネアポリスとツインシティになっている St. Paul まで。
- 二日目 は、ここから、スペリオル湖まで北上し、そして、ミシガン湖の辺にあるグリーンベイという町まで。
- 三日目、 グリーンベイから、ミシガン湖の辺を北上。そして、もう一度、スペリオル湖まで。ここには、Pictured Rocks Lake Shore というナショナルパークがあり、ここを目指す。そして、ミシガン州に入り、ミシガン半島の西海岸にあるトラバースシティまで。
- 四日目、 ミシガン半島を横切り、ヒューロン湖岸まで行き、ヒューロン湖の湖岸を南下。この日は、沼津と姉妹都市になっているカラマズーまで。
- 五日目、 このたびの最終日は、かなりの長旅。しかし、インターステーツを利用するの

で、時間的には大丈夫のはず。途中、いま、アメリカで人気映画となっているワイアット・アープの生まれ故郷の町、**Monmouth** に立ち寄る予定。

今度の旅では、勿論ナビのお供つき。これが、強力な助っ人です。これを頼りに途中、できるだけ博物館や、名所により、旅の中身を充実させようとの魂胆。

一日目

このたびの旅は、今までのものとすこし意味合いが違います。というのも、会社から仕事をやすむように言われての休暇を利用してのもので、自分ではメンタルクリニックの意味で旅をしたものです。その理由は、後日また説明いたします。旅はミネソタ、ウィスコンシン、そして、ミシガン进行を回り、ちょうどこの時期が紅葉の季節となりましたので、思い切り北に向かって走り回ることになりました。

実は、あまりに仕事をしないアメリカ人に対して、非難をしたらそれが人種差別にあたるとの問題となり、アメリカ人とのいざこざを極端に避けていく方針の会社の意向で、謹慎三日の処置となったわけです。

もともと、この人種差別は、アメリカ人が黒人や三国人を差別することを規制したもので、白人が人種差別の被害者で問題にするなど、前代未聞のこと。まったくあいた口がふさがらないという気持ちであるが、会社の処置には従うということで、三日の休みとなったわけ。そこで、気分転換にと、ミネアポリスとツィンシティになっている **St.Paul** の大聖堂を尋ね、精神修養をして来ようと言うもの。ついでに、帰りには、ウィスコンシンとミシガンの北をまわり、まだ見たことのない、このアメリカ北部大地の紅葉を楽しんで来ようと言うわけ。そんなわけで、少々気分は複雑なところはありますが、まずは、北をめざして出発となりました。

ミネアポリスまでは、デモイネ経由でインターステーツを利用するのが最も一般てきなのですが、それではあまりにも変化に乏しく、アメリカ文化の接触を楽しみにカウンティの高速を飛ばしている私としては、やはり、ローカルの道を選んで走るということにこだわりました。

リンカーンからは、77号線を北上。このルート、コーンハスカーを自称するネブラスカの大トウモロコシ畑が連続する、一大穀物収獲地なのである。その広さには驚くばかり。とにかくこの農場の広さには、トラクターなしでは成り立たない。そして、そのトラクターが活躍できる程度の平地でないとトウモロコシ畑は成立しないのである。**Fremont** という町で **North Platte River** を横切る。この町、**Omaha** のベットタウンとして急激に発展している街であるが、もともとはこの川の水揚げ地。**Omaha** から伸びている鉄道の駅があり、**North Platte** 川がここから南下をしてしまうので、近道である陸送の拠点となったわけ。そんなわけで町には、由緒ある博物館と、これまた、かつての隆盛を忍ばせる立派な住宅

が散在しているのである。ここから北に真っ直ぐあがると、70mile ほどで **Sioux** 市に着く。その間、これまた、嫌と言うほど真っ直ぐな道路が続く。朝のまだ、眠気が十分取れきれずの状態で 65mile のスピードはかなり緊張感を伴う。リンカーンをでて、1 時間半ほどで **Sioux** に到着するが、ここは、市外の集会道路を通過して、アイオアに入る。ネブラスカと隣の州であるが、二つの州の本質的な違いは、その土地の肥沃度の違い。ミズーリ川の東側のアイオアは、大平原を吹き抜けてくる西風によってネブラスカ台地の肥沃な土が飛んできた場所なのである。**Rose Hill** と呼ばれる数十メートルの厚さにもなっている、その肥沃な土地の丘が形成されているのである。だから、アイオアの大地は自然のままの形状に少し手を加えて、整地した大農場なのである。ここがネブラスカの農業と豊かさが違うアイオアの農業の実態。そんな目で見ながらドライブしていると、さすがにアイオアの農場はよく整備されている気がする。沢山のクリークが流れているし、また、緑もその分豊かな感じがする。そのアイオアの北西の大地を掠めるようにして、75 号線、60 号線と足を進める。ところどころにミュージアムもあるが、ここ辺りであれば、また、いつでも来ることができるという気がするせいか、あまり気にせず、とにかく、目的のミネソタまで急ぐ。



Worthington という町が、ミネソタに

入り、インターステーツ 90 と交差する辺りにある。この町、なかなか立派な町で、例により魅力的な **Courthouse** があるではないか。これを写真に納めないわけには行かない。というわけで、撮った写真。

この町に入る直前に大きな池がある。後で地図を調べたら、**Ocheda Lake** とある。ミネソタには、実に沢山の湖と、小さな川が縦横無尽に走っており、ここがアメリカの一大穀



物生産地であることを忍ばせてくれる。たしかに、天気予報などを見ていると、ネブラスカでは雨が降らないのに、この辺りからウィスコンシンにかけては、雨雲の通り道となっている。五大湖で水を吸い上げた雲が西に進み、西からは偏西風が吹いてくるので、その丁度ぶつかったところにできる前線のためではないかと想像しているが、ここは専門家に意見を聞きたいところでもある。雨の少ない

ネブラスカに取っては、実にうらやましいジオメトリーである。池を見ながら、「行けども、行けども、池でした。」なんて、駄洒落を作りながら、忘れないようにメモをして運転する。駄洒落が出たついでにもう一つと、ミネソタを振り、「鬼は外、福も外、みんな外、みな外だ。ミネソタだ。」下手な洒落。見損なった？

Mankato という町。この町もなかなか魅力的な町だ。名前がいい。勿論、元はといえば、インディアン言葉がその町の名前の由来であろうが、その響きがいい。ここにはカレッジもあり、学園都市の風格がある。この町からは、一揆に北に上がり、Minneapolis を目指す。

さすがは Minneapolis

Minneapolis、その名は最近、随分耳にする。それもそのはず、先日、ここにかかっていた橋が落ちて、沢山の犠牲者がでたのだ。ミシシッピー川の支流ミネソタ川を挟んで、ミネアポリスと St. Paul という町がツイン・シティーを形成している。まちの真ん中を川が分断している感じであるが、こちらは広さが違うので、両方が御互いを邪魔することなく、かつてに繁栄しているという感じ。川で分断されているという感じは微塵もない。ミシシッピー川の西側にあるミネアポリスが経済の中心として発展しているのに対し、東側の St. Paul は、政治と文化の中心として発展しているという感じである。

目的とする St. Paul の大聖堂、最初、ガイドブックで何の気なしに読んでいたのでてっきりミネアポリスにあるものとはばかり思っていた。という



わけで、高速をミネアポリスで降りる。ところが実は、これは間違い。お陰でミネアポリスの町なかをドライブすることができたが、この町、さすがに大きい。高層ビルが沢山で向かえてくれたし、その繁栄振りは、ここがアメリカの北の経済の中心地であることを存分にうかがわせてくれる。穀物の生産地となっているミネソタからノースダコタ、サウスダコタの北部大地の経済を取り仕切っているであろう。

飛んだ間違いをし、きづいたのは、それらしきところにあの立派な寺院の姿がなかなか見えないこと。直ぐにこれはおかしいときづいたが、まあ、すこし、町中見物としやれ込んだものの、道路はなかなか混んでいて、リンカーンのようにノンビリできない。というわけで早々、ナビを入力しなおしたら、なんと、まだ、この先 20mile 近く離れているようである。時間はまだ十分に余裕はあったが、肝心の大聖堂に入れないではこまる。というわけで、キャピタルシティーとなっている St. Paul へ。今度は、ナビがきちんと案内して

くれた。高速を降りるとすぐその脇に、これまた、立派としか表現のしようがない魅力的な大聖堂が顔を出してくれた。

日本なら、さしずめここで駐車に困るところだが、アメリカのこうした場所には、無料の駐車場がきちんと整備されている。最初は、これが分らなくて坂道に止めたが後で、ぐるりと一回りしてみたら、信者さんたちのためばかりではなく、小生のような飛び入りの見学者のためにも十分な配慮していれているからありがたい。



中に入ると、あいにく、この日はミュージアムは閉まっているという。残念無念という表情をしたら、案内のお姉さんが、がっかりしないで、礼拝堂なら入ることができるという。こちらの目的はそれで十分。というわけで、裏口からはいったので、三階まで階段を上る。が実は、これは、正面から入ると石段を登り、グランドステアーとなっているところ。その中にはいり、これまた、びっくりの見事なステンドグラスである。あの色合い

に何か心洗われるような気になるから不思議だ。そして、この日はすでにミサは終わっていたが、礼拝堂のなか、膝まづいてお祈りをしているシスターが1人。この人がやたらと印象的、その姿がまぶたに媚り着く。

私にも、反省するという目的もあり、ここは謙虚に帽子をとり、しばし、黙考の時間。これで、此处に来た目的が果たせたので、後は大聖堂のなかを見学。St. Louisの大聖堂でもそうであったが、こちらのこうした場所はとても寛大で、なかで写真を撮っても何の気兼ねもいらないようだ。沢山の人たちが見学に来ていたが、思い思いにマリア像の写真を撮ったり、聖者の姿を納



めていた。そんなことをしていたら、この聖堂の使いのひとが、ガラガラと音を立てながら、椅子を運び込んできた。その音が今度は大聖堂の天井に反響して、重厚な響きとなって聞こえてきた。まさしく、この聖堂の丸天井のつくりが大反響をするような形になっているのである。

こうして、大聖堂を存分に観賞し、少し時間があまったので一つ丘を隔てたところで、この大聖堂と対峙しているキャピタルハウスに向かう。が、これがまた立派。土曜日とい

うこともあり、勿論、業務はしていないので、ここに勤務する人たちのためのリザーブド



駐車場、これがこのハウスの直前にあり、ここに自由に車を止めることができる。というわけで、このハウスの前で、記念写真というわけ。これまた、なかなか見ごたえのある写真を撮ることができ、自分なりに満足。

気分をよくして、今度は、ミネアポリス科学博物館を訪問。ガイドブックによれば、ここには映像技術に優れた映写館があるという。博物間は丁度、ミネソタ川の辺にあり、展示は、その

川にすむ様々な動物の生態を中心にしたもの、そして、例により恐竜の展示物などが充実していた。ただ、特徴的なのは、人体の各器官の詳細な展示。人間というより、自分の祖先を訪ねてという感じの展示の趣向、光についての様々な実験装置のコーナー。ここでは、自分で光の特徴について確認できるような装置が沢山整っていた。同じ様に風についてのコーナー、波についてのコーナー。此处では、自分で津波を発生させることができるような装置まであり、子供たちは力いっぱい操作をしていた。天体に関するコーナーもあり、ここでは、天井からつるされた丸い球に、地球の地形の映像、天気図の映像などが移し出され、まさしく、自分がスペースシャトルに乗っているような感覚で地球を眺めることができる。地球ばかりでなく、この球には、月、火星、木星なども映写され、楽しい天体観測をすることができた。



この日の行程

Lincoln --> Sioux --> Warthington ---> Mankato -->
Minneapolis --> St. Paul ----> Minneapolis

走行距離は、443 mile でした。

紅葉を見てこよう 二日目

ミネアポリスとセントポールが違う町だと認識して折らず、昨夜は意外とモーテルに到着が遅くなってしまった。しかし、協力的な助っとのナビの威力は如何なく発揮され、ますます頼らざるを得ない状態。この日も、ミネソタからウィスコンシンに入るにはミシシッピを渡る必要があるが、その肝心の橋を渡るところで、工事中。うっかり入り口を間違えたが、ナビはその間違いを補うように案内してくれる。そんな



なわけで、**Oak Park** という町で、道を見間違えたが、住宅街のなかを回り町して、難なく橋を渡ることができた。この町、なかなか歴史のある町のように、建物は古めかしく、しかも、厳かな感じのする町であった。その昔は、ミシシッピ川を上り下りするスチームボ



ートの荷揚げの港として栄えたのではないかと思う。この橋、鉄組みの橋でいかにも丈夫そう。それでも、ミネアポリスで橋が落ちてたくさんの方が犠牲になったのはついこの間のはなし。「今、ここで橋が落ちたら、おしまいだね。」という気持ちが自然とよぎる。この橋を渡り、ウィスコンシンに入った瞬間、なんとなく木々の緑に黄色味が掛ってきたように感じたのは気のせいかな。

直ぐに35号線に入るが、ここがまた素晴らしい高速道路。夜明けの気分のよさも加わり、気分は最高。横をバイクでツアーをしている連中がいる。後ろに奥さんを乗せて、そして、荷物者を引っ張っているのである。なんとも贅沢な旅行をしていることかと思うが、こちらのバイク野郎たちはよくこんな楽しみ方をしている。やがて、35号線とお別れをし、**New Richmond** という町を過ぎ、63号線を北に、北に進む。この辺りからハイウェイの両脇の森が色づき始めている。



タートルレイクのところで、ナビに目的地を入れるのが遅すぎ、行過ぎてしまう。それでも、畑の中の道をしっかり案内してくれる。この思いがけない回り道で結構、回りの木々の色づきを楽しむことができた。コースのほうは難なく元の63号に戻る。そして、シェルレイクという小さな湖の辺を走っているときに、**Wood Crave Museum** を見つける。実は、此处は、一度通り過ぎてしまったのだが、そのあと見つけた看板に、世界一大きな、木彫りの博物館と書いてある。これは、見過ごすわけには行かないと、Uターンをして、ここに乗り付ける。博物館といっても大きな駐車場があるような立派なものではない。本当に田舎の町にある博物館のようなものだ。客は私1人しかいない。朝、まだ、早かったかもしれないが、他に車がとまっていないのだ。おそろおそろ入り口のドアを開けたら、ベルがなり、中から、管理人のおばさんが出てきた。このおばさんの説明が親切。ここは、世界中の方が見に来る博物館ですよという。この博物館、彫刻の作品がずらりと並んでいる。その彫刻というのが、実は、聖書の物語のなかの場面を再現したもので、実物大の聖者の像や、マリア様の像、そして、無数の信者の像、動物達の像と、その数がものすごい。1人の作者が何十年もかけて彫り上げたもので、なるほど、世界一といっても過言ではないような気がする。世界各地からここを訪れた人は、記念にと看板に名前を書き込んでゆく。その看板がずらりと正面のカウンターに並んでいる。よく見れば、なかに日本人の名前もちらほら。彫刻が宗教じみているので、ここを知っている信者の人たちは、世界中から此处にくるような気がする。日本から来たと説明したら、急に親しくなったこの管理人のおばあさん、日本で一年芸者をしていたと、自慢げに芸者姿の写真を持ち出してきて、仕切りに自慢していた。なるほど、なかなかの美人である。たまたま、わたしも木版画の絵を一枚持っていたので、これをプレゼントしてきた。記念写真を撮りたいといったら、その絵を訪問者の看板に貼り付けて、ここを訪問してくる人に見せてあげたいといってくれた。こんな出会いがあるから、カウンティの高速は楽しい限り。そして、ここから、さらにスペリオル湖の湖岸の街、**Ashland** に向かう。途中、ハイウェイ53号線と63号線が交差するところに **Trego** という小さな町があり、ここに **River trail visitor center** があつた。スペリオル湖を水源とする **Namekagon** という川が、**Croix national scenic riverway** に指定されていて、ここで、ツリやラフティング、そして、トレイルを楽しむのであるが、此处がその管理事務所というわけだ。こうしたビジターセンターは学習の場でもあり、また、



様々な情報を集める場でもある。ここで、この地域の生物の生態や、地質に関する貴重な情報を手に入れた。ここには、ナショナルパークの保護官がいて、詳しい説明もしてくれる。顔を出したのは若いお嬢さん。どこから来たのかとか、どこを旅しているのかとしきりに質問してきた。ネブラスカだが、

アメリカの真ん中なので、去年はメキシコ湾まで、そして、今年カリフォルニアまでドライブ旅行をしてきたといったら、自分はテキサスの方から来たが、このウィスコンシンから出たことがない。実に羨ましいよと言っていた。ビジターセンターに寄ると、とにかく、その地の貴重な情報が得られ、一度にその地域に親近感を覚えるのである。アメリカの自然の保護に注力していることは言わずもがなで、こうしたセンターが子供たちの体験の場であり、学習の場にもなっているのが、いかにも、アメリカの現実に即した教育の充実ぶりを見たような気がした。詰め込み、効率だけを考えている日本の実態を反省することしきりであった。

このあたりから道路の両脇の森が随分深くなり、まるで、凱旋するひとを迎えるように道路の両側に整然と並んでいる木々の紅葉が見ごたえの十分なものとなってきた。そんな紅葉を楽しみながら、やがて、スペリオル湖の湖岸の街、**Ashland** に着く。ここは、湖の入り江にできた町で、町に入った途端に、この町が歴史のある港町であることがすぐに分った。とにかく、教会やらコートハウスらしき立派な建物がずらりと並んでいるのである。そして、驚いたのは **Ashland** のビジターセンター。これは立派。このビジターセンター、湖に住む動物、生物の博物館になっているばかりでなく、二階は、アートセンター、そして3階建ての一番上には展望台まであり、遠くスペリオル湖を望むことができる。ここ **Ashland** も歴史のある街。メインストリートには昔の繁栄を偲ばせるような重厚な風の建物と、ここがリゾート地であることを思わせる立派なヨットハーバーがある。ガソリンスタンドで給油をしていたら、横に数台のオールドモービルが止まっていた。真っ赤な、いかなもマニアックなオールドカーがいたので、随分、貫禄があるなあと言ったら、1946年製だと説明してくれた。



私は、1945年生まれだから、殆ど歳が同じだねといったら満足気な顔をして、いかにも嬉しそうなふうであった。ここかに **Ironwood** という町まで東に進み、そこから、今度は、ミシガン湖に向かう。**Northern Highland American Legion** という地域を横切るが、このあたり、大森林地帯のなかに湖がそこそこに顔を見せる。アップダウンはあるが、真っ直ぐな道、その道の消えるところまで、両脇には紅葉した木々が、まるで凱旋將軍を迎えてくれるかのごとく、一列に並んでいる。そして、湖と湖を繋ぐクリークはカヌー遊びには持ってこいのせせらぎ。素晴らしい紅葉のなかを、澄み切った水の流れにまかせ、ここで川下りをするなんてなんと贅沢な趣向かと、そんな遊びを知らない私にさえ、想像しただけで羨ましくなるような自然だ。途中、ハイウェイからはずれ、わき道の林のなかをドライブしてみた。カーブのその先の森の紅葉がどうなっているのか、素敵な紅葉を期待しながら

のハンドル捌きもなかなか乙に言ったものである。こうして、この日の宿泊地の **Green Bay** に到着。此処も、ミシガン湖の入り江の一番奥にできた港町。かつては此処に上陸し、ここから大陸の中に入植していった西洋人たちの希望を港町なのである。

この日の行程

Minneapolis ---> St.Paul ---> New Richmond ---> Turtle Lake
---> Snell Lake ---> Trego ---> Hayward ---> Drummond --->
Ashland ---> Ironwood ---> Mercel ---> Arbpr Wotae --->
Three Lakes ---> Argonne ---> Crandon ---> Lily --->
Shawano ---> Green Bay

この日の走行距離は、455mile でした。

三日目



Green Bay の町が港町としてかつて隆盛を誇っていたことは、町の雰囲気ですぐに感じ取られた。この日、すこし早く起きて、ダウンタウンまで行き、その歴史を散策することにした。町を取囲むようにして高速が走っている。その中心に素晴らしい **Courthouse** があった。とにかく町ができたころの人口はといえば、この広大な土地からすれば、ごくごくほんの僅かしかいなかったのであろう。だから、その中心と

なっている **Courthouse** や庁舎、そして、教会などはとにかく贅沢なほど広い土地に建てられており、しかも、その周りには広い駐車場やロータリーがあるのである。月曜日、まだ出勤前と言うこともあり、まちの中心のお役所街で好きなように車を動かし、写真をとる。あまりに夢中になり、工事現場に入り込んだが、ダンプで工事に来た業



者が、こんなところで写真を撮る奴は余程の変わり者だなというような顔をして笑っていた。気分をよくし、役所の駐車場で写真を撮り通りにでたら、うっかりそこが一方通行。仕方なく暫く逆行をする。角を曲がり事なきを得たが、パトカーに見つかったらたちまち切符を切られるところだった。この町の散策もこれくらいが潮時と、ハイウェイにもどり、ミシガンの湖岸を走る41号線に入る。途中の **Oconto** という町も小さな町ではあるが、此处にも目を見張るような素晴らしい教会が建っていた。そして、暫く走っていたら、道路わきに **Geographical Marker** とある。なに、なに、此处が地理学上、なにか特徴のあるところか、と此处は確認せずに通るわけには行かない。そして、なんと、初めて、ここが北緯45°であることを知る。すなわち、北半球の丁度、半分のところに来ているわけだ。何の変哲もない案内板であるが、旅を趣味にしているものにとっては、こだわりの場所であることには間違いない。日本で言えば、丁度、北海道の網走のちょっと南くらいのところである。ここを過ぎると、**Menominee** という川を越えると **Michigan** に入る。そして、もう一度、スペリオル湖に向かう。目的地は、**Pictured Rocks National Lakeshore** という、ナショナルパークである。ご存知のようにアメリカには、自然の素晴らしさを存分に味わうことができるナショナルパークというのがあるが、ここは、その中でも、**Lakeshore** というこだわりまでついている。ただ、場所が場所だけに、観光客は主に夏に集中しているのであろう。この日も来ている観光客は数グループだけである。それもやたらに広いパークであるから、人影はまばら。自然全部を独り占めという感じである。お目当ては岩の湖岸。ここを眺めるに丁度よい場所は、

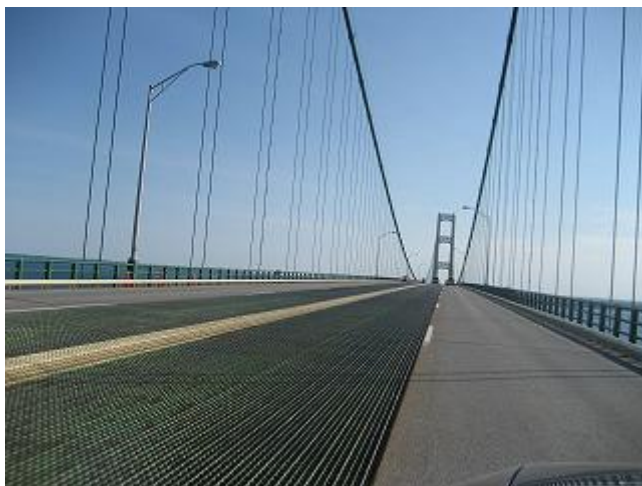
Castle という名前がついていた。その昔此处に城壁でもあったのかも知れない。さすがに名にたがわず、素晴らしい岩の彫刻を見ることができる。その鋭さは氷河がけずったのではと思うほどの力強さが感じられた。観光地はその湖岸のほかに砂浜と滝と散歩道がある。その砂浜の見事なこと。砂がとてもきめ細かく、しかも均一。石ころ一



つないのである。石ころがないだけでなく、ごみ一つないところがまた素晴らしい。砂浜に下りる階段のところには小さなベンチが二つほどあった。その一つのベンチの上に、男性のスニーカーと女性の靴がきちんとそろえられて脱いであった。勿論、こんなところで誰もそれを失敬するような人はいない。ここまで来るのに、幹線道路から10マイルくらい走らなければならない閑散としたところであるからなにも此处まで来て他人様の靴をいただいていくような不届きものなど、ありえないのである。その靴の持ち主達、きっと裸足で、別世界にいるような気分散歩しているのであろう。あまりにも砂浜が大きくて二人がどこにいるか分らない。其れでも、きっと2人は自分たちだけの世界で自分たちの将来

のことなど話しているのではないかと想像しただけでも、羨ましくも、また、楽しくもなるような状況であった。浜に下りたら、少し離れたところから、老年の夫婦がなにか幸せをかみ締めながら手に手にを取り合って、ゆっくりゆっくり歩いてきた。そうなんです。この砂浜の素晴らしさ。緑の松林に囲まれて、やや、緑がかった青い湖と、そして、白い雲が絵模様を描いている空、そんなところを素敵なひとと一緒に歩いていたらず手を握り合いたくなるような、そんな情景なのである。そんな気分にいる2人に申し訳なかったが、記念の写真を撮ってもらった。これは、野暮な男のそんな大事な写真なのである。

海の匂いこそしないが、素晴らしい砂浜を存分に楽しみ、今度は南下してミシガン湖の湖岸までいく。とついても、この岸はミシガン湖の北のはずれにあたる。ルート2号線がミシガン湖とヒューロン湖を隔てている Mackinaw という橋まで続いている。この橋、つり橋で、なんとなく、瀬戸大橋に似ているのである。5mileほどの長さ、ここを右にミシガン湖、左にヒューロン湖を眺めながら渡る。湖の水の青さに感動しながら、行く先のミシガン州の森を思い浮かべる。橋を渡り、今度はミシガン湖の東海岸に沿って湖岸を楽しむ予定だったが、海岸線走る道は、森の中を突き抜ける一車線の道路。ここを自分だけしか車がいないと、先の見えないカーブでもスピードを落とさず、しばし、レーサーの気分でのハンドル捌き。まるでトンネルのなかを走る感じで森林浴ドライブ。気分最高。たまに、湖が姿を覗かせるが、延々と続く森のなかの道。森が次第に深くなってくると、このまま、森のなかで道に迷ってしまうのではとの不安さえよぎる。ところが、この森林道路のすぐわきには、ちゃんとした生活道路のカウンティハイウェイが走っているのである。この森林道路は、そこから少し入った、別荘地の中の道だったのだ。時々見える林の中の立派な家は、あたかも別荘の風格。とにかく豪勢な作りなのだ。自然の地形を利用して、広々とした庭の向こうに、まるで白亜の殿堂のような館



なのである。こんな家に滞在して、湖でボート遊びを楽しんでいるのだろうとは容易に想像がつく。全く、羨ましい連中である。そんなことを思うと、ネブラスカの工場でも、平気で一週間くらいのパケーションをとるアメリカ人がいるから、逆に小憎らしささえ覚える。お前にも一ヶ

月の休暇をやるから、別荘に行って十分静養して来い、なんていわれても、われわれは、そんな滅相もないなんて返事をする程度か。アメリカ人よ、遊んでばかりいるな、の気持ち。

この森の抜けたところに **Petosky** という町があり、ここから、暫くは砂洲のようになった道路を進む。この町の近くの湖岸にあったレストエリアで見つけた看板に、ここにかけてアメリカで一番古い原子力発電所があったと出ていた。膨大な電力を必要としたヒューロン湖の湖岸にあるデトロイトを中心とした工業地帯にエネルギーを供給していたのではと想像する。こうして、夕暮れませるミシガンの湖岸のまち、**Travers City** に到着。実は時間があれば、ここから30分くらいでいけるミシガンの湖岸までいって湖に沈む夕陽を眺めるつもりであったが、その夕陽に間に合わず、ここで湖に沈んでゆく夕陽をしばし観賞。

この日の行程

Green Bay ---> Menominee --> Escanaba ---> Rapid River
---> Trenar ---> Munising ---> Pictured Rocks National Lakeshore
---> Manistique ---> Blaney Park ---> Brevort --->
St. Ignace ----> Mackinaw Bridge ---> Leveribng -->
Cross Village -----> Petoskey ----> Travers City

走行距離は、483 mile でした。

四日目

この日は、ミシガン州の西から東に向かい、半島になっているミシガン州を横断。その後、東海岸、つまりヒューロン湖のほとりを走り、その後、ミシガン州の南西にある **Kalamazoo** まで走りぬく予定。かなりの強行軍である。



Travers City から、ミシガンの中央を走るインターステーツまで行き、さらに北上して、ヒューロン湖とミシガン湖の付け根から、ヒューロン湖にそって存分に海の風を楽しむつもりでいたが、どうも、これまでの二日間のドライブの所要時間をみると、どうも途中での立ち寄りに時間をとられ、二時間くらい足りない。

というのも、このあたりネブラスカのセントラル時間より一時間の時差があり、そのつもりではいたが、どうも宿泊地への到着が遅すぎる。幸いにしてカーナビがその威力を遺憾なく発揮してくれているが、それでも、夕暮れのドライブは案内板が今ひとつ醜いこともあり、どうも不安な気持ちになる。これでは疲れが残るということで、この日のコースは思い切り短絡させることにした。

Travers City から東に向かい、途中で北に進路をとる。短絡するとはいえ、少しは北に行ってからヒューロン湖に行こうという算段である。Kalkaska という町から 131 号線を走るが、暫くしてから、迂回路という表示がでてくる。勿論、ナビがあるから心配をしたわけではないが、前を行く車のあとをついで、迂回路の案内にしたがって進むが、これが



また、たいへんな迂回路で、なかなか方角が目的の北のほうに向かないのである。農場のなかを走る道路は、何マイルはしっても下に戻る気配がない。こんなに肝心の道路が閉鎖されて、何マイルも迂回しなくてはならないとなると、その道路の脇で生活している人は一体どうやって、町まで行くのかなと余分な心配をする始末。とにかく迂回のほかに道路がないのだから、ひょっとしたら畑のなかを突っ切っ

て自分の家まで辿りつくなんていうことをしているのではなどと想像する。そんなときにこそ、どんな地形の荒野でも乗りまわることのできる ATV(All Terrain Vehicle) という車が威力を発揮するのかななんてことを思い出す。なにしろ、その車のシートを作っているのが当社だからだ。そんな、理解も難しい迂回路を何とかクリアーし、ミシガン州を縦に二分しているインターステーツ 75 に到着。この高速辺りがミシガン州の東西の分水嶺になっている。少しばかり小高い丘が続く。その向こうには、ヒューロン湖までこれまた広大な森が続いている。75mile くらいがたまに矩形に曲がる角はあるが、殆ど直線道路である。森の紅葉を見ながら、遥か彼方前を走る車の後をノンビリと走る。青い空、白い雲、ところどころ色濃く紅葉してはいるが、深い緑の森の中を片側二車線のハイウェイを突っ走る、この心のゆとりがなんともいえない。こうして、やがて、ヒューロン湖の入り江にできた港町 Alpena に到着。この町もいかにも歴史のある風情。とにかく、アメリカでは、西部は高々 200 年の歴史しかない。ところが、東海岸は、400 年の西洋文化の歴史があるのだ。東に行くに従い歴史の深さを感じることができるのはそのためである。

ヒューロン湖の湖面を見ながら今度は南に一揆に下がる。これも湖とはいえ、殆ど海のような感覚。つつい心が大きくなり、ハンドルを握る手もゆるむ。カーステレオから、「ブルーライト横浜」のメロディーが聞こえてくると、自然と鼻歌交じりのドライブとなる。海岸

線にはあらあらしさはないが、湖面を渡ってくる東風に煽られている白波をみると、やはり、ここの自然の厳しさを感じる。こことて、日本ならほぼ北海道の緯度なのである。湖岸のあるパークで一休みしていたら、あたりはかもめの大群。これがまた、車など少しも恐がらないどころか、なにか、車を適ししているかの如く、こちらに向かってくる。その数の多さに、思わず、ヒッチコックの映画が頭をよぎる。題名は「鳥」ではなかったかと思うが、突然背中に冷やりとしたものを覚える。人間がこの地上に出てくる何万年も前に彼らがこの世界で自由に生きていたのだと思えば、これもさもありなんである。私たちは文明の利器を謳歌し、自然を破壊し、勝手気ままに地球を荒らしまわっている(?)が、時に、そんなことも考えて自戒する必要があるのではないか。

ミシガン州の真ん中あたりに **Bay City** という町がある。ここは、デトロイトから北に 100mile くらいのところにある港町。ここも入り江の中にできた素晴らしいところ。勝手は、此処にも大量の西洋人が上陸し、自然と肥沃な土地に満ちたミシガン州を開拓していったのであろう。その **Bay City** には、**Shiawasee** 川がヒューロン湖に注いでいるが、これがまた、川幅が広く、その上流に **Saginaw** という町がある。なんと、この町に入ったとたん車の窓にも



のすごい数のスタック(煙突のようなもので、実はここから、排気ガスが大気に放出されている。それは、自動車工場の塗装ラインで発生する塗料を吹き付けるために使用していたガスの残りを大気に放出しているのである。)があり、ここに強大な自動車工場のあるこ

とが直ぐにわかった。日本の自動車メーカーがこんなところにまで来ているのかと一瞬思ったが、これは、なんと、**GM** の工場であった。その広さの凄いこと。アメリカは土地が広いから、排ガスで公害なんてことは滅多に問題にならないが、此処のように歴史のある工場では、そのまわりに住宅ができるとそんなこともいってられないのではないか。従業員が住む町は勿論、その工場からかなり離れたところにあったが、古い工場ほど公害問題で苦勞していることは、その環境をみれば容易に想像がつく。ちなみにホンダの自動車工場などは、工場が一つの町ほどのひろさで、それもこうした塗装工場は中でも、人里離れた場所というのが適当なくらい離れたところに作られているのである。

多分、この **GM** の自動車工場の城下町として発展したのであろう **Saginaw** というまち。これまた凄い風格のある町で、いかにも昔の繁栄振りを誇っているかの如くの印象であった。突然の **GM** の工場の出現に、改めてアメリカは走り回らなければ、実態が分らないという意を強くした次第である。

こうして、アメリカの自動車産業の栄枯盛衰を思い描きながらこの町を後にする。これから先、今日の宿泊地 Kalamazoo までは、まだ 120mile くらいあるが、途中、なんとしても立ち寄りたところがある。というわけで、遠回りになるインターステーツにするか、近道になるカウンティハイウェイにするか迷うところだったが、ここは、後者のルートで、その目的地、Owosso という町に向かう。

実は、この町、ミシガン州を縦によぎるインターステーツ 127 と、横によぎるハイウェイ 21 の交差するところにある交通の要衝。この 21 号線は、ヒューロン湖の南の端、Fort Huron とミシガン州の西の主要都市 Grand Rapids を結ぶ大事な通行路である。現在では、すこし南にインターステーツが走るようになったので、かつてほどの交通量はないのであろうが、ここに歴史があることはたしか。その証拠となるのが、この Owosso の町にある、Curwood Castle という名所なのだ。

その名のとおりのお城であるが、これは、解説によればかつてのフランスにあったお城の門のレプリカとのこと。James Oliver Curwood が、1922 年に此処に作り始めたもので、暑さ 15 インチのレンガを積み重ねてできている。かれは、そのレンガをここから 7mile も離れたある農場から自ら運んできたというから、その執念には頭が下がる。そして、この城が完成したのは、彼が亡くなる僅か四年前というから驚きである。

彼は、この地に 1878 年に生まれた。彼の父は靴職人であった。そして、有名なインディアンの酋長の Mohawk の妻は、母方の曾、曾、曾婆さんに当るのだ。また、海洋小説の作家 Captain Marryat は、父方の祖叔父さんにあたる家系とのこと。彼が 6 歳のときに彼の家族はオハイオに移り、そこで農場を開いていた。彼は、9 歳くらいの時から小説を書き始め、16 歳の時には処女作が印刷されたとのこと。やがて彼はミシガン大学を卒業し、その後デトロイトで、新聞記者として活躍した。それと平行して彼は、カナダの政府から以来され、カナダの西部を探検し、その記録を残すような仕事をしていた。その間、彼は絶えず、カナダの北西部を旅し、いたるところに小屋を建て、そして、沢山の紹介小説を書き続けた。かれは、当初は狩猟を楽しみにしていたが、これが自然の破壊と動物の絶滅の危機を招くということに気づき、

今度は、その程に生涯を捧げるような活動を開始した。やがて、彼は、ミシガン州の自然保護主張者となり、遊びとしての魚釣りや狩猟から動物たちを守る運度を開始した。彼の自然保護は単に動物や、魚に留まらず、植物、樹木までも幅をひろげ、Roscommon(Michigan 州の真ん



中辺りにある大きな湖 Houghton Lake のほとりの町) の近く Au Sable River の辺に、900

本に渡るすべて異なる種類の大きな樹木を、三年間かけて植林したという。そして、彼の偉業がこの Castle なのである。この辺り、Owosso の町のアートセンターになっており、この Castle のほかに、アート博物館、歴史ある橋などが、その回りに集められていた。そして、肝心の Castle に行くと、時間も五時丁度であったので、もう閉まっているかなと恐る恐る、ドアに手をかける。看板には6時までと書いてあるので、まだ開いているはずであるが、そのドアが開かない。客も他にいないようだし、今日はもう駄目かなと、その Castle の回りを一周して帰ろうとおもい。庭で記念の写真を撮り、それでも、開館時間は6時までだと思いなおし、もう一度、ドアのノブを回す。今度は、その扉にもともと着いていたいかめしい、ドアの取っ手ではなく、新しくつけられた現代風のノブがあったのでこれをまわす。と、おっ。開くではないか。やがて、その呼び鈴に気づいて、中からひとりの老人が出てきた。ここの管理人のようだ。中に入って良いかと聞けば、大歓迎の様子。よく来たとばかり、この城の説明をしてくれる。とにかく、この管理人、今日一日中、この城の中、1人で留守番をしていたようで、何時来るかも分からない客をまって、何時までも机に向かい仕事をしていたわけだから、それこそ、まるで牢獄に入れられているような感覚でいたのではなかろうか。懇切丁寧に、この城のことについて説明してくれ、城の物見が三階にあるから、そこまで上ってみろという。この物見には小さなまどが、360度の方角についているが、それは、15から16世紀のヨーロッパの城をまねてつくったもので、少し息苦しいほどの重厚さがある。二階には、建設当時の書斎があった。ここで、ひとりご満悦になりその椅子に腰掛けて写真を一枚。なにしろ、此处にある家具は一切、立てられた当時のものだという。その古めかしさにアメリカ人の伝統を大事にする心意気を感じる。そして、もう一度メインフロアーに戻り、その老人の写真を撮りたいというので快く了解してくれた。そのお礼に、「お前は、そこにあるチェアーに座って、写真を撮れ」という。勿論、貴重な家具は、すべて、手を触れないように注意書きがしてある。これはありがたいと思ったが、もし、私が腰掛けて、椅子が崩れでもしたら、たいへんなこととここは丁重に遠慮し、その前で写真を撮ってもらった。こうした、町の小さな博物館などでは、とにかく、訪問客が少ないので、大歓迎をしてくれ、いろいろなそこに潜まれている物語を教えてくれるので、ただ単なる観光とは違い、その土地に親しみを感じ、急に、なにか物知りになったような気がするから楽しい。



気分よくして、すぐ脇にあるこれも歴史のあるような橋の袂で写真を撮ろうとしたら、そ

ここに1人の女性のカメラマン、否、カメラウーマンが、ファインダーを覗いている。三脚をつけて、構図を考えたりしているのであろうか、なかなか慎重に操作をしている。よく見れば、その橋の上でモデルとなっているのは、多分、彼氏ではなかろうか。橋のしたを流れるせせらぎを眺めながら、済ましていた。これは、野暮な邪魔はできないと早々に退散。管理人の爺さんが言っていた。この川では自分の城から、釣り糸をたれば、幾らでも鱒が釣れたんだがなあと。これも時代の流れを感じさせる一言であった。

危うく見損なうところだった **Castle** でしばし楽しい思いをし、この日の宿泊地、**Kalamazoo** に向かう。実は、この日の泊まりにここを選んだのには少しこだわりがあった。というのは、この町が私の古さとである沼津と姉妹都市となっているのだ。その関係で私の中学時代の恩師がよく此処にきて、国際交流をしているのだそうだ。その先生、実は、女性の英語の先生で、これがまた実に厳しかった。進学のため田舎の中学から町の中学に転向したのだが、田舎の町の中学の英語がとても遅れていて、そのため、転向したときには、教科書の半分くらいを飛ばしてしまった。今でも覚えているが、受身形の構文が出てくるところである。とうじ、これが全く理解できなくて、テストの度に、それまで 90 点くらい取れていたものが、急に、60 点くらいしか取れなくなってしまった。それ以後、英語が苦手になってしまった。というより、分らないから嫌いになってしまったのだ。高校に



入り、何とか、そこは挽回できたのではないかと思うが、それまで、英語のできる奴は嫌いだというくらいまで、自尊心を傷つけられたような気がする。今でも英語は苦手であるが、工作上、仕方なく使っているような状況。余談はさておき、数年前になるが、初めてのアメリカ駐在で、インディアナにいる頃、そう遠くないから、一度ここで会おうとお誘いをうけたことがある。残念ながら、その頃は、アメリカ

力をあまり知らなかったし、また、アメリカに来るタイミングも合わず、結局、この計画はお流れになっていた。そんなこともあり、今回、ここを通過するようなコースであったので、これは、是非、この町に立ち寄り、町の雰囲気だけでも見てゆこうということにしたのである。あいにく、途中での寄り道に時間をとられ、此処に到着したのは、7時近く。宿はインターステーツを降りたすぐのところであるが、そこは町の方からみれば郊外。直ぐに地図を見て、ダウンタウンまで車を走らす。夕暮れでもあり、初めての道は分りにくかったが、ここはナビの出番。間違いなく、町の中心街まで運んでくれた。勿論、**Kalamazoo Valley** 博物館というお目当ての博物館は閉まっていたが、その玄関回りから、この町がいかに文化都市であることが容易に想像できた。此処には、**Western Mich. Univ.** と

Kalamazoo Coll.の二つの大学があるのだ。インディアナとの州境にある South Bend という町には、友達も留学していた有名な Notre Dam の大学もあることは知っていたが、この辺りの秀才がこうした大学に集まってくるのであろう。ビルの上に顔をのぞかせている月の写真を撮り、この日は無事目的の Kalamazoo を探索でき、満足、満足。

さすが、Kalamazoo 、これには、溜まらず、参った、参った。

名前がいいですね。Kalamazoo、ここから、まずは 始めよう・・・なんてね。

四日目

Traverse City ----> Kalkaska ----> elimina ----> Gaylord ---> Atlanta
----> Alpena ----> East Tausas --> Bay City ----> Saginaw ----> Owosso
----> Lansing ----> Marshall ----> Battle Creek ---> Kalamazoo

この日 450 miles 走りました。

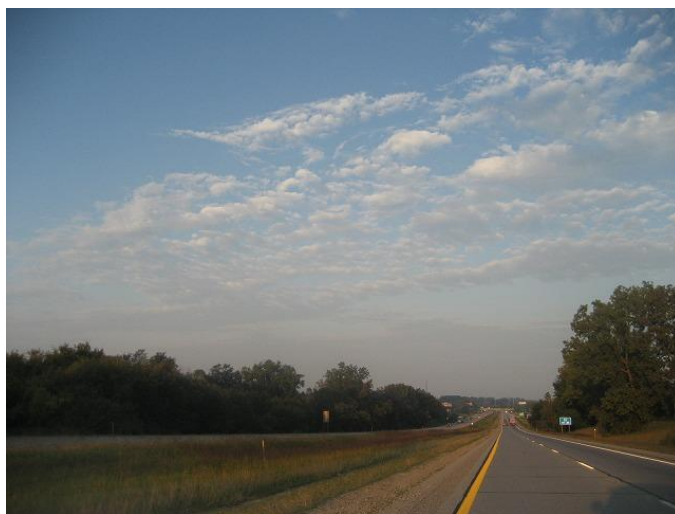
五日目

カラマズーからインターステーツを飛ばす。この日の行程は少々長いが、途中の寄り道も少ないので何とかなるだろうとの楽観的見方。

ミシガンからインディアナを抜け、イリノイに入っていくが、この辺り、シカゴの郊外ということもあり、インターステーツの車の量がものすごい。普段、ネブラスカの田舎道しか走ることのないわれわれには、その車の多さに疲れてしまう。とりわけ

高速が交差しているところはすべて立体あるので、その分岐が難しい。左に行くには、ま

ず、右にでて、それから、左折というのが田舎のハイウェイであるが、立体交差になると、これがまず、通り越して、右にでて、それから、ぐるっと大きく旋回して今度は左に入るという構図になる。ところが、



ここに右から合流してくるルートがあるからややこしい、しかも、それが右から入ってくるのか、左から入ってくるのか、初めてのものには分らない。また、高速を降りるにしても、左の車線から真ん中に下りるのか、右の車線から降りるのかも、看板にはしっかりと説明がされているのだが、老眼の上、字も感覚では町の名前が分らないので、正しく読まないと判断できない。悪いことに、そこに案内されている町が、自分の知っている町ならまだしも、その町の前であったり、その後の町であったりすると、もう、たちまち、混乱状態。パニックである。それに、この辺り、次々の高速ができており、中に、有料道路がある。それがまたややこしい。料金を払う車と、チケットを持っている車では車線がことなるし、料金を払うために、一度高速を降りるなんていうケースもある。だから、うっかり料金を払い損ねなんていうのも珍しくない。そんなときにはどんな請求書が来るのかな、なんて恐れていたら、この高速を走することは難しい。何とかなるさの居直りで、このときも払い損ねは気にせず、そのまま、突っ走る。有料道路で分岐点を間違える。料金を払ったあと、正規のルートに戻るのに、もう一度、有料道路に乗らなければならない。勿論、ゲートがあり、ここで料金を払うと、信号が赤から、青に変わるので、ゲートを抜けることができるのであるが、別に赤であるからといって走りぬける事ができないわけではない。こちらは、料金所に係りの人がいるのは稀で、たいていは、大きなバケツを半分にしたような投入器がついている。これがまた、いい加減で、車から投げ入れても、落ちないことがある。二枚入れて、一度に一枚しか落ちないと、赤がつきっぱなし。二枚目が落ちても、次の車の一枚目だと判断し、これも、青にならない。こんな程度であるから、二枚目が落ちたところで、信号は赤だったが、ちゃんと投入したので、ここは突き抜ける。これは、まだ、良心的な通過。うっかりして、フリーパスのカードがないのに、このレーンに入ると料金を払うことができない。勿論、他の車が猛烈なスピードで走っているの、ここで止まって支払うなんて危険なことはい。こんなときには、すまないといって通過するより仕方がない。もともと、この料金が、50 セントや 75 セント程度であるから、後から請求するにしても、その郵便料金のほうが高くなるのだから、ここは、大目に見てもらうことにする。そんなこと、たびたびやっていると、実は、この不良パスはすべて記録がとられているとのこと。どこでどのようになっているか知らないが、後から、請求書が来ることもあるというから、恐れ入りましたである。

この日、時間に余裕があれば、とこだわったのが今アメリカで人気映画となっている「ワ



「ワイアットアープ」の生まれた家というのを尋ねること。このいえは、イリノイの西はずれの町、Moline というところでインターステーツ 80 を南下し、30mile いったところの町、Galesburg の郊外にある Monmouth というところにある。ワイアットアープが活躍したのは、ここからカンザスに行き、そして、カンザスを所狭しと活躍したのである。最初彼は、バッファローの毛皮を剥いで、売りさばいていたが、これがまた凄い、鉄砲でしとめたバッファローは、内臓を裁いたりしない。首をちょん切った後、皮の一部を縄で縛り、あとは、馬で引っ張って剥いでゆくのである。なにしろ毛皮一枚だけが金になり、肉はいらなかったのであるから、バッファロー一匹、その毛皮から、肉、そして、骨まで利用し、その一匹で1人が一年間生活し、余分なバッファローを殺すことはしなかったインディアンにしてみれば、



全く持って迷惑千万な話である。かれはその後、ならず者の喧嘩でこれを押さえつけたところから、シェリフになり、それ以後は、善玉として活躍するのである。カンザスのドッジシティなどでは、彼をモデルにして「OK 牧場の決闘」など、西部劇の興行をしている。その彼の生まれた家を見て来ようというわけである。その途中、Galesburg という町によったが、ここがまた、歴史のある街。その名前から直ぐにドイツ系の町であることが分るが、此処に、ゴシック建築の立派な教会が建っていた。その一角にビジターセンターがあり、ここでも、中年のおばさんが暖かい歓迎をしてくれた。町が整然としており、いかにもドイツ人の几帳面さを感じさせてくれた。この町のまわりは、これまた、素晴らしい農場が、どこまでも続いている。ネブラスカなどと違い、平地の広さが違う。どこまで行っても平らなのである。もちろん、この辺りは雨もあり、木々もあるが、広い畑には邪魔になるので、これもちらほらしかない。これだけの広さがあると、農業もたいへんだろうが、機械化され、トラクターを自在に使っているのだから、「意外と楽だー」などと洒落を言いながらハンドルを握る。

さて、いよいよお目当て、ワイアットアープの生まれた町、Monmouth 町に近づく。西部劇では、大活躍をし、人気者のワイアットアープの生まれたところだから、さぞかし案内もはっきりし、直ぐに見つけられるだろうと思っていたのが大間違い。まちに入っても、この町、田舎なのに College もあり、いまでは、むしろ学園都市の風格のほうの色濃い。はっきりした住所も分らないまま、時間ばかり経ってゆく。仕方なく、ガソリンスタンドに入り、店のなかで、「ワイアットアープの生まれた家を見に行きたい」と尋ねたら、あれ

をこう行き、その先を曲がり、何件目かだ、などと説明してくれたが、こちらにはさっぱり分らないので、きょとんとしていたら、ガソリンを入れにきていた叔父さん。よし、ワシが案内するから、俺のトラックのあとをついて来いと、ガイドをしてくれることになった。すると、殆ど先程、走っていた場所のすぐ近くにワイアットアープの家があった。ここだ。此処だとばかりクラクションを何度もならし、その叔父さん、走って行ってしまった。確かに、この家、探しにくい。看板も横の塀に、申し訳程度に、丁度、西部劇の映画でお尋ねものを紹介する顔写真くらいのポスターがはってあるだけ。



家は、閉まっており、横の家は、今、建て替えの工事中という状況。思ったほど、地元の人は、ワイアットアープにあまり執着していない感じがした。かれの名声は、むしろカンザスにわたり、ならず者との対決で名を馳せたのであり、地元の人にとっては、そんなことは何のメリットもないのであろう。というわけで、期待したほどの感じではなかったが、私にとっては、アメリカでワイアットアープの生まれた家まで見てきたということで、これでまた、アメリカに住んでいた一つの勲章が得られたような気がする。

この町から西にいったところに **Burlington** という町がある。ミシシッピー川を越えて、アイオアのほうにある町であるが、ここがまた凄い歴史を誇るまち。勿論、此処より下流の **St. Louis** から、ミズーリ川を遡り、さらに西にいった入植者達もいるが、実は、かれらは、西部開拓に出遅れた人たち。最初の西部開拓は、ミシシッピー川の西側からはじまったのである。だから、このミシシッピー川の西側にある水揚げ港となっていた町は、**250**



年も **300** 年も前から開拓が始まっていたのである。こんなことを想像するに難くない建物が、川べりから西に向かって誇らしげに立ち並んでいる。勿論、先住民族のインディアンとの戦いは避けられなかったろうが、そこに広がる広大な肥沃の土地を開拓してからは、無限の富を築き上げていったに違いない。そんなことを偲ばせるほど立派な建物が密集して

いた。この町を散策しながらミシシッピー川の辺まで行ってみた。そこは、この川でレゾートをするボートの港であったが、そこには、上流から流されてきた無数の小枝が打ち上げられていた。そんな中から、これはとおもう杖の代用品を拾ってきた。これは、水に現れ、表面がつるつるになった、素晴らしい造形物と自分なりに解釈して、大事に使うことにした。ありがたいプレゼントを手に入れた。お気に入りの杖を手に入れ、自分だけでは申し訳ないと、ちょっとばかりアンティークのお店により、土産を手にいれた。さすがに歴史のある町の小道具屋ということであったが、そこに、かつてインディアナで 30 ドルで入手した古い天秤ばかりがおいてあった。それがなんと 200 ドルだったのにはびっくり。これは大もうけをしたな、なんて、そんなことを考えながら、ここから西に真っ直ぐ伸びている 34 号線をひた走る。この 34 号線、実は、ネブラスカのリンカーンを通り、コロラドのエステスパークまで続いている。一昨年には、そのエステスパークからリンカーンまで走り抜いたことがあるので、ここから走れば、この 34 号線を東から西まで、突き抜けたことになる。これもまた、カウンティハイウェイにこだわるものにとっては、一つの勲章になりそうだ。アメリカ中部の大平原では、道路は東西南北にきっちりと仕切られている。そんな状況のなかで、夕方西に向かってドライブするのは、太陽が真向かいから指してくるので、いささか苦しいものがある。この日も、その洗礼をうける。とにかく、道路が地平線まで延びているが、その地平線のところに太陽があるのである。これは、なかなか厳しい。できれば、車高の高いトラックから一定の距離を保ちながら、その陰に入ってはしるのが一番楽だということが分った。でも、そんなことばかりしていたのでは、あの感激を覚えることはできなかったはずである。Burlington をでて、Mt. Pleasant という町に向かう。そして、そこからが真っ直ぐ西に向かう道路となる。その先に Ottumwa という町に向かって走っているとき。すでに太陽が殆ど西の地平線のしたに隠れてしまった。これは、ちょっと時間がかかりすぎたかなと思って反省しながらハンドルを握っていたときに、太陽の沈んだすぐ脇の木陰の上になにやらきらめく星が見えた。その自分の金星は明けの明星だった。ということは、これは、水星ではないかとすぐに思いが走った。確かに、シンチレーションはしていないし、太陽の沈んだあとに、二



等星くらいの明るさではっきりと光っているのである。時間的にも、明け方の太陽が昇ってくる直前か、あるいは、この時間しか見ることができないものだ。間違いない。これこそ水星なのだ。生まれて初めて見る水星。本当だ。シンチレーションしていない。やったあー。水星だ、水星だ。これも、まさしく、アメリカのこの大地の広さ、道路の状況、そして、この大農村地帯ならではの現象なのだ。こんな、幸運なことはないと、これまた、

興奮覚めやまぬ時間に暫しうとれた次第。

こんな大感激のご褒美までついた今回のドライブ。このあと、真っ暗闇の中の一人旅が随分続いたが、夜の十時に無事、リンカーンに帰還。つかれた。でも、楽しい五日間だった。万歳、アメリカである。

この日の行程

Kalamazoo ----> root 94 ----> root 80 ----> Joliet -----> La Salle ----> root 74
---> Galesburg ----> Monmouth ----> Burlington ----> Mt. Pleasant
-----> Ottumwa ----> root 34 ---> Creston ----> Red Oak ----> root 29
----> Omaha ----> root 80 ----> Lincoln

この日 727 miles 走りました。

五日間での総走行距離は、2567 mile でした。